

ポストメディア時代の翻訳論

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2020-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今野, 喜和人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00027285

令和元年6月12日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03199

研究課題名（和文）ポストメディア時代の翻訳論

研究課題名（英文）Translation Theory in the Postmedia Age

研究代表者

今野 喜和人（KONNO, Kiwahito）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：70195915

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,100,000円

研究成果の概要（和文）：グローバル化とIT革命により、現代は様々なメディアやジャンルの枠組みが揺らいだ「ポストメディア時代」を迎え、その中で、翻訳は量的にも質的にも大きな変貌を遂げている。本研究ではそのような翻訳の現状と意義を重層的・学際的・国際的に考察すべく、多様な言語、文化、時代における文学、映画、絵画、思想等の実例を通じて考察した。同時に、翻訳と密接な関わりを持つアダプテーションについても、理論面と実際面の解明を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代において、英語への一極集中や機械翻訳の発達といった、人間の翻訳活動を一見不要にするような事態が進行する一方で、実は日常生活のあらゆる場面で翻訳の重要性は増しており、言語、文学の研究はもとより、カルチュラル・スタディーズや現代思想においても翻訳論は中心的な課題となりつつある。様々な言語、文化、時代における翻訳とアダプテーションの理論と実際を明らかにしたことで、「ポストメディア時代」における文学芸術の分析に重要な鍵概念を提供でき、国際的、学際的な立場から新たな詩学の可能性も切り開いた。

研究成果の概要（英文）：Globalization and the IT revolution, among other factors, have forced us to enter a “Postmedia Age” defined by profound changes on how we perceive traditional media and generic boundaries. Among these changes, the way we practice and analyze “translation” has seen important quantitative and qualitative transformations. In this research project, we looked at specific examples of literary, cinematic, artistic and philosophical works that were created in various languages, cultures and eras, in order to understand from a multilayered, interdisciplinary, and international perspective, the current state of translation and its significance within the context of this “Postmedia Age”. We also analyzed translation and the closely related practice of adaptation from a theoretical and practical perspective.

研究分野：比較文学文化

キーワード：翻訳論 アダプテーション 比較文学 比較文化 芸術論

1. 研究開始当初の背景

グローバル化やインターネットの普及によって、国と国、言語と言語、文化と文化の間の境が低くなり、様々な情報の流通量が飛躍的に増大している。英語への一極集中や機械翻訳の登場といった、人間の翻訳活動を一見不要にするような事態が進行する一方で、実は日常生活のあらゆる場面で翻訳の重要性は増しており、言語、文学の研究はもとより、カルチュラル・スタディーズや現代思想においても翻訳論は中心的な課題となりつつある。それはIT革命による視聴覚メディアやデジタル技術の爆発的発展を背景にした諸芸術の付置のゆらぎ、「ポストメディア」と称される事態とも並行しており、翻訳研究はこのような文学芸術の分析に重要な鍵概念を提供するだけでなく、翻訳のモデルそのものが現代の美学を支えている側面もあると言える。そのような時代において、旧来の翻訳研究も当然新たな対象と方法論を打ち立てる必要が生じており、またその探求によって、新たな詩学を生み出すことも可能になると思われる。本研究計画はこのような時代的要請から生み出されたものである。

2. 研究の目的

人間のことが生まれて以来行われてきた「翻訳」の営みは、現代におけるグローバル化とIT革命によって、量的にも質的にも大きな変貌を遂げている。20世紀における英語の一極支配と機械翻訳の登場によって早晩衰退するかに思われた人間の翻訳活動は、むしろ日常生活において以前よりも積極的な役割を果たすようになり、様々なメディアにおける従来の枠組みの変容・崩壊・統合と相互に影響を与え合いながら、今世紀に入って文学研究はもとより、言語学、カルチュラル・スタディーズ、哲学、美学や批評理論の中心的な課題となりつつある。本研究は「ポストメディア時代」とも称される現代において、文学や芸術のみならず、思想や文化そのものの伝播・交流における翻訳の持つ意味を重層的・学際的・国際的に考察することで、新たな詩学の可能性を開こうとするものである。

3. 研究の方法

上に述べたように、グローバルな規模で同時発生的に、かつオール(もしくはノン)・ジャンルの生じている現象を総体として捉えるには、能うかぎり多くの言語とカテゴリーにわたる、能うかぎり多くの作家・作品とその周辺事象を視野に入れる必要がある。また、現代の特殊性を明らかにするためにも、過去の事象の分析をおろそかにすることはできない。これらの分析を支え、またその分析から新たに修正が加えられるべき理論面の考察も必要である。そのため、本研究では専門とする言語、時代、領域、所属学会、さらに母語も異なる11名のメンバーからなる多彩な組織を形成した。

代表者と分担者が具体的に主に研究対象とした言語と研究対象を表にすれば以下のような(今野は代表者、以下は分担者)

メンバー	今野	田村	南	安永	桑島	花方
対象言語	日、仏	日	日、韓	仏	中	西、英
分析対象	理論、文学、映画	文学、映画	文学、思想	文学	文学	文学、映画

山内	大原	コルベイユ	大園	ローベル
英	西	日、仏	日、独	日、仏、チェコ
文学、絵画	歴史、文学	理論、文学	理論、言語学	理論、文学

これらのメンバーと、関心を同じくする同僚研究者による互いの研究発表、さらに他大学の研究者や創作者の招待発表等を通じて、既存の学会組織では得られないような知見を共有することが可能になり、各学会での研究発表や、研究会の機関誌『翻訳の文化/文化の翻訳』への寄稿、さらに最終的な研究書出版に繋がった。

4. 研究成果

今回の研究成果は、代表者および分担者に加え、研究会に随時参加した同僚研究者3名が寄稿した研究書、『翻訳とアダプテーションの倫理 ジャンルとメディアを越えて』(春風社、2019年)に結実した。その目次は次の通りである(下線を引いた氏名が代表者・分担者)

はじめに(今野) / 第一章(コルベイユ)「馴化された翻訳と渋澤龍彦 教育、法律と倫理」 / 第二章(安永)「ポール・ヴァレリーの翻訳体験をめぐる ウェルギリウス『牧歌』 仏語韻文翻訳から『樹についての対話』執筆へ」 / 第三章(ローベル)「ミラン・クンデラと自己翻訳 フランスを介した「一般化」から読み解く作者の意図」 / 第四章(中村)「削除と伏字 谷崎潤一郎と窪田空穂の『源氏物語』現代語訳」 / 第五章(大園)「事態把握と翻訳 認知言語学から見た逐語訳とアダプテーションの間」 / 第六章(花方)「法の侵害か、モラルの侵犯か 映画『ノスフェラトゥ』と原作『ドラキュラ』をめぐる考察」 / 第七章(今野)「芥川龍之介と黒澤明の貸借対照表 映画『羅生門』のアダプテーション再

考」/第八章(田村)「二つの「伊豆の踊子」 翻案(アダプテーション)としての映画」/第九章(大原)「ヌマンシアのアダプテーション ローマ帝国からセルバンテスそしてナショナリズムへ」/第十章(山内)「ジェスの「トランスレーションズ」 あるいは創造的な共謀へのいざないについて」/第十一章(南)「ル・ボン「民族心理学」の東アジアにおける受容と翻案 李光洙・夏目漱石・魯迅を中心に」/第十二章(袴田)古代庭園文化の受容と翻案 寝殿造庭園と名所の発生/第十三章(桑島)「もの言う農民作家 閻連科の小説に見る倫理」/第十四章(渡邊)「動物と私のあいだ 中上健次『熊野集』「熊の背中に乗って」「鴉」」。

以下、本書を中心に、それ以外の業績も含めた代表者、分担者それぞれの成果について述べる。

まず、代表者の今野は研究の基礎となる理論的指針を明確化することを目指し、上記研究書の「はじめに」を執筆した他、主に映画と文学のアダプテーションに関連して、芥川龍之介の「藪の中」と黒澤明の『羅生門』の比較研究という古典的テーマを、現代的視点から総括した。

映画と文学の関係については、芸術作品が異なる媒体に変換されて再創造される際にどのような問題が生じるかという視点から、芸術(記号)間翻訳、アダプテーション(翻案)の問題として、川端康成の小説「伊豆の踊子」と五所平之助監督による第一回映画化作品『恋の花咲く伊豆の踊子』、および同作家による小説「古都」と早坂暁脚本によってテレビドラマ化された『古都』を比較対照することによって、翻訳の忠実性を超えたテキスト同士の関係性について知見を得た。

映画については他に、花方が映画『ノスフェラトゥ』と原作『ドラキュラ』に関連して法律的議論も含めて考察した他、映画監督アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥとアルフォンソ・キュアロン(スペイン語読みではクアロン)の英語作品を題材に、デジタル・メディアによる映像加工が主流となった2000年代の映画において、フィルムによる撮影を前提として作られていた表象と受容のコンベンションがどのように変質しつつ受け継がれているか、またそれがどのようなメタレベルでの批評を含みつつ作品に取り込まれているかを、門林岳史らのポストメディア論を援用しながら分析した。

また大原は文学文化における普遍的なテーマである歴史上の包囲戦、特に第二次セルティベリア戦争におけるヌマンシアの陥落が、絵画、彫刻、文学、戯曲、年代記など異なるメディア間で2000年以上の長い間どのように絡み合って表現されてきたのかについて考察した。また、フランコ独裁政権期にファランヘ内部から移民問題についての批判が生じた際、史実が外国映画から影響を受けながら制作され、またどのような政治的配慮をしながら、検閲の問題を潜り抜け上映に至ったのかについても明らかにした。

メディア間の広義の「翻訳」については、山内が20世紀後半のカリフォルニアを代表する画家ジェスの連作「トランスレーションズ」を分析し、複数のイメージの間や絵画と言語の間で生じる翻訳の可能性を明らかにした。またジェスの最良の理解者としても高名なアメリカの詩人マイケル・パーマーの作品を多角的に分析し、研究書『マイケル・パーマー オルタナティヴなヴィジョンを求めて』(思潮社)を2015年に上梓した。同書は2016年に第7回鮎川信夫賞(鮎川信夫現代詩顕彰会)を受賞した。

一方、主に文学プロパーに関わる狭義の翻訳については、ローベルが作家の文学創造に与える「越境」の影響に注目し、特にミラン・クンデラの自己翻訳、外国語執筆、世界文学に向けた作家像形成について考察し、学会発表3件、論文1件、著書1件の成果発表を行った。国際比較文学学会第21回大会ではリービ英雄や多和田葉子を例にクンデラとは異なる越境文学の新しい局面にも触れた。2017年度SJLLF秋季大会ではナボコフ、ベケット、アンドレイ・マキエヌの各専門家とともに越境文学に関するワークショップを開催した。

安永はポール・ヴァレリーを考察の軸として研究を進めた。ヴォルテールやニーチェなどの著述にきっかけを得て展開されたヴァレリーの思考や感性のありようを文化間翻訳として捉え、ヴァレリーの生と著述の意義が次男フランソワにいかに関承されたのかについて、世代間翻訳の例として論じた。また、フランス語による朗読の実践を通じ、声というメディアの意義についての考察を深めた。

南は朝鮮に関連させていくつかの論文を発表した。単著論文「李箕永著・大村益夫訳『故郷』を読みながら」(2018)、「<朝鮮近代文学選集>の刊行と李泰俊『思想の月夜』音訳・二重言語・母語性」(2017)においては書評の形態を借りて、従来の権威的な翻訳について批判している。他方、共同研究である「松本清張文学の韓国における翻訳状況と特徴」(2019、第20回松本清張奨励賞)、「三浦綾子文学の韓国における翻訳受容の現況と分析」(2018)においては翻訳実態の基礎研究を行った。

桑島は中国の作家閻連科が「チャタレイ夫人の恋人」を換骨奪胎しつつ、中国の体制を挑発した「人民に奉仕する」を研究対象とし、倫理・規範を逸脱するかに見えて、逆に現代中国社会の根深い闇を炙り出し、倫理・規範の揺らぎや人の尊厳を考えさせずにはおかないありようを跡づけた。

こうした研究を支え、またこれらの研究によって修正されるべき翻訳の理論的研究については、コルベユが主に西洋翻訳の現状を分析するフランス語と英語の研究を参考にし、日本の翻訳の独自問題を理解するために新しい翻訳論を切り拓いた。また、間メディア性のアプロー

チを用いて、戦後日本の文学、漫画、映画におけるアダプテーションに含まれている「翻訳」を考察した。その結果、戦後における海外文化受容を理解するために、メディア媒体とは関係なく、翻訳が鍵であることを明らかにした。

さらに、メンバーの中で唯一の言語学研究者である大園は、言語化に先行する事態把握（事態の捉え方）のプロセスの分析を通し、逐語訳からパラフレーズに至るさまざまな翻訳方法の背後には、事態把握における話し手・書き手が好んで選択するスタンスが関与的であり、これには個別言語的側面もあること、従って、表面的な逐語訳が必ずしも「正確性」を反映しないことがあり得ることなどを明らかにした。

以上、様々な言語、文化、時代における翻訳とアダプテーションの理論と実際を明らかにしたことで、「ポストメディア時代」における文学芸術の分析に重要な鍵概念を提供でき、国際的、学際的な立場から新たな詩学の可能性も切り開いたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 21 件)

花方寿行、ポストメディア時代の映像表現 デジタル映画における「長回し」をめぐる、翻訳の文化 / 文化の翻訳、14号、2019年、1-25、査読無。info:doi/10.14945/00026592

田村充正、縦夢模様 の記憶 テレビドラマ版川端康成『古都』について、翻訳の文化 / 文化の翻訳、14号、2019年、73-92、査読無。info:doi/10.14945/00026594

今野喜和人、芥川龍之介を読む黒澤明を読む、翻訳の文化 / 文化の翻訳、13号、2018年、19-41、査読無、info:doi/10.14945/00024897

大原志麻、移民映画 Surcos (溝) と前期フランコ体制の変容、翻訳の文化 / 文化の翻訳、13号、2018年、1-18、査読無、info:doi/10.14945/00024896

大園正彦、Intersubjektivität am Beispiel von Modalpartikeln. Eine kontrastive Fallstudie aus japanischer Sicht、静言論叢、1号、2018年、17-31、査読無、info:doi/10.14945/00024965

田村充正、二つの『伊豆の踊子』 小説と映画のあいだ、翻訳の文化 / 文化の翻訳、12号、2017年、1-13、査読無、http://doi.org/10.14945/00010038

南富鎮、<朝鮮近代文学選集>の刊行と李泰俊『思想の月夜』 音訳・二重言語・母語性、翻訳の文化 / 文化の翻訳 12号、2017年、79 - 98、査読無、http://doi.org/10.14945/00010405

大園正彦、構文の適用可能性 日独語の好まれる事態把握との関連において、Sprachwissenschaft Kyoto、15号、2016年、1-22、査読有

(他 13 件)

〔学会発表〕(計 17 件)

Corbeil, Steve、The Ethos of the Literary Translator in Japan after 1945、Twenty-Fifth Annual Japan Studies Association Conference、2019年

南富鎮、『韓国近代文学選集』(平凡社)にみる翻訳の問題、慶北大学人文学部、2018年

ローベル柊子、ミラン・クンデラの『無意味の祝祭』における自己パロディあるいは自己オマージュ、日本フランス語フランス文学会 2018 年度春季大会、2018年

Corbeil, Steve、The Hypervisible Translator in Post-Occupation Japan: The Case of Shibusawa Tatsuhiko、Language Studies Research Seminar (於・メルボルン大学)、2018年

安永愛、Paul Valéry dans ses derniers jours : Au miroir de Voltaire、国際比較文学会 (於：ウィーン大学)、2016年

田中柊子、Le Choix linguistique et l'identité des écrivains frontaliers - autour de la tentative de Miran Kundera、国際比較文学会 (於：ウィーン大学)、2016年

大原志麻、16世紀ヌエバ・エスパーニャにおけるサンティアゴのアダプテーション、日本イスペインア学会第62回大会、2016年

(他 10 件)

〔図書〕(計 7 件)

今野喜和人(編著) 翻訳とアダプテーションの倫理 ジャンルとメディアを越えて、春風社、2019年、414p + xi

花方寿行、我らが大地 19世紀イSPANアメリカ文学におけるナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然描写、晃洋書房、2018年、315p

ローベル柊子、ミラン・クンデラにおけるナルシスの悲喜劇、成文社、2018年、262p

山内功一郎、沈黙と沈黙のあいだ ジェス、パーマーとペトリンの世界へ、思潮社、2017年、231p

山内功一郎、マイケル・パーマー オルタナティヴなヴィジョンを求めて、思潮社、2015年、279p

(他2件)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：大藪 正彦

ローマ字氏名：OZONO Masahiko

所属研究機関名：静岡大学

部局名：人文社会科学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：10294357

研究分担者氏名：安永 愛

ローマ字氏名：YASUNAGA Ai

所属研究機関名：静岡大学

部局名：人文社会科学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：10313917

研究分担者氏名：山内 功一郎

ローマ字氏名：YAMAUCHI Koichiro

所属研究機関名：静岡大学

部局名：人文社会科学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20313918

研究分担者氏名：田村 充正

ローマ字氏名：TAMURA Mitsumasa

所属研究機関名：静岡大学

部局名：人文社会科学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：30262786

研究分担者氏名：南 富鎮

ローマ字氏名：NAM Bujin

所属研究機関名：静岡大学

部局名：人文社会科学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：30362180

研究分担者氏名：花方 寿行

ローマ字氏名：HANAGATA Kazuyuki

所属研究機関名：静岡大学

部局名：人文社会科学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 70334951

研究分担者氏名：桑島 道夫

ローマ字氏名：KUWAJIMA Mitsio

所属研究機関名：静岡大学

部局名：人文社会科学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 80293588

研究分担者氏名：大原 志麻

ローマ字氏名：OHARA Shima

所属研究機関名：静岡大学

部局名：人文社会科学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 80515411

研究分担者氏名：ローベル 柊子(田中 柊子)

ローマ字氏名：RAUBER Shuko

所属研究機関名：東洋大学

部局名：経済学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 20635502

研究分担者氏名：コルベイク ステイブ

ローマ字氏名：CORBEIL Steve

所属研究機関名：聖心女子大学

部局名：現代教養学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 80469147

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。